

自閉性障害児（者）親の会に所属する母親と父親に関する 臨床心理学的研究

— 親の会が主催する活動への参加プロセスを通して —

松 岡 拓

【問題と目的】

自閉性障害児（者）は生涯にわたって様々な支援を受ける必要とその機会があるが、どのような施設による保育や療育、生活支援などの支援を選択するにしても、自閉性障害児（者）本人にとって一番身近な支援者としての存在は養育者である親ではないだろうか。西田（2011）が、自閉性障害児に対する早期介入・早期療育の有効性について専門家と親の認識の共有を挙げているように、療育という観点でも親の存在は重要なものとなっていると考えられる。

渡部・岩永・鷺田（2002）によれば、対人関係の障害や知的障害を持つ児の母親の育児ストレスと疲労感、健常児や運動障害を主体とした児の母親よりも高いと述べている。山岡・中村（2008）は、「高機能広汎性発達障害児の父親が最初に子どもの問題に気付いた時期は平均して4歳であり、母親より気付きが遅いことを明らかにしており、障害認識においては否定的感情のみを抱く人が多い」と述べている。このように、自閉性障害児（者）の母親と父親は、自分の子どもに障害があるということにショックを受けながらも、それを徐々に受け止め、子どもに向かい合っているのではないだろうか。

二木・山本（2002）は、障害の告知と受容の観点から親の会などのセルフケアグループの果たす役割の重要性を示唆しており、母親にとって親の会は重要なサポート源となっている。

一方で、父親にとっても三原（2004）が、自閉症の子をもつ父親の診断のショックが少なくなったのは、自閉症をもつ親の会に参加していたことによるとして、自助グループが大きな精神的サポートとなり、その重要性を示唆している。そうであるにも関わらず、井上（2008）が指摘しているように様々な疾患や課題の親の会についての研究

は多くない。こうしたことから、自閉性障害児（者）の親の会についての研究を行うことは意義があることだと思われる。

また、これまで親の会はサポート源の一つであるという結果に終わることが多く、会員である親の側からの視点で親の会を扱った先行研究はほとんど無い。山岡・中村（2008）が、高機能広汎性発達障害児の母親と父親それぞれで、障害認識の相違を見出しているように、この親の側からの親の会への視点においても異なると考えられる。

さらに、金子（1978）や宮本（1988）が自閉症親の会の発展過程や活動や歴史の紹介をしているように、自閉性障害児（者）親の会では様々な活動が行われている。こうした親の会が主催する活動に参加していくことによって、親は様々なサポートを得ているのではないかと考えられる。

また、山田（2008）によれば、発達障害児・者の親の会に入会した多くの親において、子どもへの対応が望ましい方向に変わってきている。このように、親の会に入会した親には何らかの変化が生じており、入会前から入会後にかけて、時間の経過によって変化する面があるというプロセスとしての要素があると考えられる。その中でも特に、親の会が主催する活動へ参加するプロセス（事前のアナウンスがあってから活動に参加し、参加を終えるまでのプロセス：以下、参加プロセス）に何らかの特徴が見られるのではないかとと思われる。

そこで、本研究では、自閉性障害児（者）親の会に所属する母親と父親における、自閉性障害児（者）親の会が主催する活動への参加プロセスを明らかにすることを目的とする。

【方法】

研究協力者はA県自閉症協会（以下、『親の会』）会員とした。探索的な研究である点や、研究の蓄

積がなされていない分野であることから質的研究によるアプローチを採用した。

データの収集では、インタビュー・ガイドを作成し、半構造化面接法を用いてインタビューを行った。インタビュー・ガイドの内容については、『親の会』会長と話した内容を参考にし、大学院生とのロールプレイを通して作成した。

2012年8月に『親の会』会長の協力の下、会員に向けて研究協力の依頼を郵送した。インタビューは返信のあった会員である母親7名父親6名計13名に対して、2012年9月から10月にかけて、X心理臨床相談センター及び、協力者が希望する場所で行った。

研究協力者の属性等については、母親7名（平均年齢48.4歳）であり、そのうち専業主婦が3名でその他はパート等であった。父親は6名（平均年齢55.8歳）であり、そのうち定年による無職が2名おり、その他は会社員等であった。また、夫婦での協力が4組あった。『親の会』の入会年数は、1年未満が2名、1～5年が5名、6～10年が2名、10年以上が4名であった。障害をもつ子どもの平均年齢は重複を除くと19.8歳であり、小学生4名、20歳以上が5名とやや偏った。

データの分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAと略す）を用いた。M-GTAはデータに密着した分析から独自の理論を生成する研究方法として考案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチの一つであり、木下（2003）によってその方法論が確立されている。

【結果と考察】

分析にはインタビューで得られた全ての研究協力者のデータを用いた。母親のデータ分析の結果、10のカテゴリー、37の概念が生成された。父親のデータ分析の結果、11のカテゴリー、27の概念が生成された。そして母親と父親それぞれで、『親の会』が主催する活動への参加プロセスが生成された。

明らかにされた参加プロセスでは、自閉性障害児（者）の母親は『親の会』が主催する活動に対して、出来る限り参加するというものから自分の

子どもに合ったものだけを選択して参加するというものまで、様々な参加の仕方であり、自分自身や子どもの体調などに合わせ、将来への見通しをもって活動に参加していた。また、活動に参加することで母親は、他の親との関わりや子どもの観察によって母親自身や父親、子どもに変化があることや、居心地の良さを感じたり、活動に対して今ひとつという思いを抱くのではないかと考えられた。

自閉性障害児（者）の父親もまた『親の会』が主催する活動に対して、若い父親に自分の経験を伝えていこうという態度や出来る限り運営の手伝いをしようという協力姿勢など、様々な参加の仕方であり、子どもの体調に合わせ、活動参加への見通しをもって参加していた。活動に参加することで父親は母親や子ども、自分自身に変化があることを感じ、『親の会』に対する居心地の良さを感じていたり、活動が今ひとつという思いを抱いていた。母親と異なる点として、『親の会』の運営などの組織面に着目している姿が明らかになった。

全体を通して、母親は父親に比して子どものことを良く考え、子どものために活動に参加している部分が強く、父親は子どものためだけでなく、母親を支える姿勢をもって活動に参加している面があるようであった。

この明らかになった参加プロセスによって、例えば親が困ったときに『親の会』が頼れる存在になっていることなど、どのような点がサポートになっているのか想定出来る点や、『親の会』に入会しない理由や退会していく理由について考えることが出来るのではないかと考えられる。

一方で、今回の結果は、対象とした『親の会』とその会員に限定された参加プロセスである可能性や、子どもの年齢によって生成される参加プロセスが違うのではないかとということが限界や課題として挙げられる。また、経年による参加プロセス自体の変化や、他の発達障害児（者）親の会の参加プロセスとの差異にも着目する必要があると思われる。